



授受表达的 中日对照研究

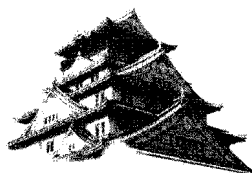
——从中国学习者的角度来看

丁 伟 著

授受表达的中日对照研究

——从中国学习者的角度来看

丁 伟 著



 復旦大學 出版社

图书在版编目(CIP)数据

授受表达的中日对照研究/丁伟著. —上海:复旦大学出版社, 2011. 11
ISBN 978-7-309-08381-1

I. 授… II. 丁… III. 汉语-对比研究-日语 IV. ①H1②H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2011)第 171039 号

授受表达的中日对照研究

丁 伟 著

责任编辑/黄昌朝

复旦大学出版社有限公司出版发行

上海市国权路 579 号 邮编:200433

网址: fupnet@fudanpress.com <http://www.fudanpress.com>

门市零售: 86-21-65642857 团体订购: 86-21-65118853

外埠邮购: 86-21-65109143

常熟市华顺印刷有限公司

开本 850 × 1168 1/32 印张 9 字数 185 千

2011 年 11 月第 1 版第 1 次印刷

ISBN 978-7-309-08381-1/H · 1777

定价: 25.00 元

如有印装质量问题, 请向复旦大学出版社有限公司发行部调换。

版权所有 侵权必究

序 言

对于日语学习者来说,授受关系句型是日语学习的难点之一。每当接触日本人的会话,会发现日本人口中经常会出现授受关系句型。有很多用法,虽然听得懂,但是却不知道为什么那么用,当然要让学习者自己说,就更困难了。由此可见,日语授受关系句型因为日本人常用而成为重点,也因为学习者不会用而成为了一个难点。目前为止关于日语授受关系句型的探讨并不少见,但是没有一个“一针见血”的讲解。就此,本书将站在日语学习者的角度,对日语授受关系句型进行透彻的分析,同时通过对日语学习者的授受关系句型使用上的大量取证,分析出日语为母语者与日语学习者在授受关系句型使用上的差别,借此给日语学习者在授受关系句型使用上带来启发与帮助。

日语授受关系句型听到时,难于理解;运用时,就更不容易了。因此,要想能够像日本人那样游刃有余地运用授受关系句型,我们需要学习的不仅是授受关系句型本身,更要参透日本人在使用授受关系句型时,是如何理解与把握当时所面对的情况

的。作为外语学习者,只有学会了母语说话者对于情况的理解方式,说出来的外语才是地道的外语,而不是我们通常所说的“汉语式日语”。这种学习观,不但适用于授受关系句型的学习,也同样适用于其他语法项目的学习;不但适用于日语的学习,也同样应该在其他的外语学习中得到融会贯通。望此书的分析给广大日语学习者带来参考与借鉴。

编 者

2011年9月2日

目次

第一章 研究背景	001
1.1 研究の動機と目的	001
1.2 理論根拠	004
第二章 先行研究	015
2.1 統語的特徴において	015
2.2 「視点」「恩恵」において	016
2.3 意味機能において	017
2.4 日本語恩恵表現の中国語対応表現	032
第三章 研究方法	037
3.1 言語データの収集	037
3.2 学習者の用例データの収集	060
第四章 日本語授受表現の再考	071
4.1 「～てくれる」表現について	071

4.2 「～てやる」表現について	089
4.3 「～てもらう」表現について	102
4.4 全体のまとめ	109
第五章 日本語授受表現の各表現間の比較	112
5.1 「～てくれる」表現と「～てもらう」表現の 比較	112
5.2 「～てやる」表現	116
5.3 「～てください」表現、「～てくれ」表現と「～て」 表現の比較	117
5.4 授受表現を使用しない時の話し手の捉え方	125
5.5 主観性の度合いの差異	130
第六章 日本語「～てくれる」・「～てやる」表現の 使用	134
6.1 対照分析	134
6.2 対照分析仮説	155
6.3 誤用分析	159
6.4 使用実態	172
第七章 日本語「～てもらう」表現の使用	182
7.1 対照分析	182

7.2 対照分析仮説	204
7.3 誤用分析	209
7.4 使用実態	220
第八章 結論	232
8.1 日本語授受表現の再考結果のまとめ	232
8.2 日本語授受表現の使用のまとめ	236
参考文献	273

第一章 研究背景

1.1 研究の動機と目的

現代日本語には、物や恩恵の授受に関わる動詞が幾つかあり、その中で、「あげる」、「やる」、「さしあげる」、「くれる」、「くださる」、「もらう」、「いただく」という七つの動詞が、授受動詞と呼ばれる。また、現代日本語には、他の動詞の「～て」形の後につき、本来の意味が変わったり、希薄されたりすることにより、文法的な意味を表すようになる語類がある。それらの語類は通常「補助動詞」と呼ばれる。授受動詞が他の動詞の「～て」形に付くことにより、作られた補助動詞は「授受補助動詞」と呼ばれる。

日本語では、授受補助動詞を使った表現は「授受表現」と呼ばれる。その定義は、『初めての日本語教育・1[日本語教育の基本知識]』（高見澤 1996）によると、「授受表現とは「あげる、さしあげる、やる、もらう、いただく、くれる、くださる」といった動詞を使い、物や行為による恩恵の授受を表す表現である」ということである。

授受動詞を補助動詞として用いて恩恵の授受を表すという

言語現象は、日本語の歴史を遡っていくと、遙か昔からあったことが分かる。井島(1999)では、「室町時代頃から授受動詞を補助動詞として用いた例が若干見られ、幕末・明治頃から増加し始め、現代では授受動詞を用いずには自然な日常会話が成立しないほどになっている」と述べている。以下は、「浮世風呂」に見られた授受補助動詞の例である。

- (1) だんな様から支度をして遣はさうから、相応な所を見
立ろとおつしやいますか

(「浮世風呂」二下)

以上のことから、授受表現という言語現象は、日本語の長い歴史にわたって、使われてきた表現であることが分かる。

日本語の性格として、話者の視点・立場からの状況叙述という点が挙げられる。森田(2002)は、「授受表現はまさにそれで、「私は彼に真実を教えました」「彼は私に真実を語った」と、事実を事実として何の色づけもなしに述べることをしない。そのような突き放した言い方をせず、「私は彼に真実を教えてあげました」「彼は私に真実を語ってくれた」のように、行為関係の成立に話者の対人感情を上乗せして叙述しようとする。物事の成り行きをドライに記述するのではなく、常に「人間対人間」「相手や他者対己」の構図の上で、実態を己の視点から把握していこうとするのである」ということを記述している。他の言語と比較して、日本語は〈利益・恩恵〉の授受に敏感な言語であることが分かる。

以上のような理由で、授受表現が日本語ほど豊かではない言語、例えば、中国語や英語などを母語としている日本語学習者には、日本語の授受表現は最も習得が難しいところの一つであると言われている。

従来、国語学や日本語学などの分野で、日本語の授受表現に関する研究は盛んに行われてきた。例をあげれば、70 年程前の、松下(1930)は授受表現に関して、最も古い記載を残したものであり、最も新しい研究としては、金澤(2007)があげられる。これらの先行研究の中で、最も詳しく論述されてきたのは授受表現の「格助詞」や「構文要素」などの統語的特徴と、「話者の視点」や「行為参与者の上下関係」などの意味機能と、他の言語との対照である。それに対して、実際の状況下で授受補助動詞はどう使われるか、どのような特徴を持つかなどの語用論の視点からの研究は殆ど見られない。特に、「恩恵」の「捉え主」とも言える話し手の捉え方に関しては、「～てくれる」表現しか関連する論述が見られず、「～てやる」表現と「～てもらう」表現においては、全く見当たらないといっても過言ではない。

また、外国人日本語学習者が日本語を習得する際に、最も困難に思われるのは、日本語の授受表現の習得であることは、周知されている。例外なく、中国人日本語学習者にとっても、日本語授受表現の習得が大きな困難点の一つである。それは、授受表現における中国語と日本語の差異によるところが大きいと思われる。二つの言語の差異を究明するために、対照分析というのは有効な分析方法の一つとして認められている。

対照分析の提唱者の一人であるLadoは、次のように対照分析が外国語教育における重要性を示している：

学習者の外国語と母国語とを比較・対照した教師は、真の問題が何であるかをよく理解しているので、外国語を教授するに際しての問題点を十分に把握することができる。(1957)

にもかかわらず、授受表現に関する従来の研究には、日本語の授受表現のみの研究は数多くされているのに対して、日本語と中国語の対照研究はそれほど見られない。

そこで、本書では、日本語の授受表現を話し手の捉え方の観点から新たに分析したうえで、中国語の授受表現との比較を通して、その差異を究明し、更に、中国人日本語学習者の日本語授受表現の使用実態を明らかにすることを目的とする。

1.2 理論根拠

1.2.1 母語の影響と対照言語分析

外国語の習得が学習者の母語に強く影響されるということは、一般に広く認められている。このことの明らかな裏づけは、学習者の発表に見られる「外国人」なまりである。中国人の日本語は中国語のように聞こえることが多い。学習者の母語は、発音以外のレベル、例えば、語彙や文法などにも影響を

及ぼすと考えられる。この影響は、恐らく、直ちには明らかに
ならないであろうが、いずれ多くの言語学習者や教師によっ
て証明されるであろう。

行動主義言語学を理論的根拠とした対照言語研究時代には、母語の影響は目標言語学習において極めて重大な問題であると考えられ、その問題を解決する手段、方法が対照言語分析であると考えられた。

ロッド・エリス(1994)が、「対照分析が示唆する内容を確認するためにのみ、複雑な対照分析を行っても意味がない。対照分析が価値のあるものであれば、この分析により誤用の予測がつくのであろう。……対照分析の出発点は教授学上の必要性にあった。」と述べたように、対照分析の意味は学習者の誤用を予測し、外国語教育への貢献にある。

それでは、対照分析によって得た結果はどのように外国語教育に生かすかという、一つのルートとして、対照分析仮説が挙げられる。

1.2.2 対照分析仮説とその批判

ロッド・エリス(1994)によると、対照分析仮説とは、学習者は外国語の習得の際、母語の影響を強く受け、その影響により誤用を犯してしまうというものである。対照分析仮説では、言語の習得上の誤用は、母語と目標言語の言語形式の規則の違いにより発生すると考えられており、学習者の起こす誤用は、推察できるとされた。

外国語の習得における誤用についての見方は歴史的に大き

く変化した。この変化は言語習得観の根本的な変遷を反映するものである。

1950年代と60年代は、外国語の習得において行動主義的な言語習得観が支配的な時代であり、目標言語学習者が示す誤用は、人間が持つ弱点的傾向の一つの現れとして捉えていた。

つまりこの時期においては、目標言語学習者が犯す誤用は、学習者の母語から来る負の転移の結果であるか、不十分な学習によって引き起こされるものであると考えられた。

前者の干渉的誤用は、確立されている母語の言語習慣が目標言語の中へ混入するもので、目標言語の習慣がまだ十分に形成されていないために起こるものであるとされる。

後者の誤用は、学習者の側に原因がある場合と、教師の側に原因がある場合とに分けられる。学習者の側では、注意力が足りなかったり、記憶が十分でないことが考えられ、教師の側では、説明が不足したり、練習の機会を十分に与えないことなどが考えられた。

この時期の誤用についての興味が干渉的誤用に集中していたのは、この時代の特徴からして当然なことである。

この種の誤用をいかに回避するかということが、この時期の最大の課題であり、そのための有効な手段として、対照分析が採用された。この手段は、学習者の母語と目標言語をさまざまなレベルで対照的に分析し、共通した部分と異なった部分を確認することを目的とするものである。

根底にある前提は、共通した部分の学習は、母語からの正の転移によって促進され、異なったものについては負の転移に

よる干渉が起きるので、学習が阻害されるとするものである。このように対照分析によって、学習者が直面する困難点を前もって知ることは、教材編成や指導法の工夫の重要な指針を与えると考えられた。このような考え方は対照分析仮説と呼ばれる。

この仮説は、目標言語をいかに効果的に教授するかという教授実践的な必要性から発したものであり、この意味において基本的に教授的なものである。同時に対照分析そのものは、何らかの新しい教授法を提供すべく意図されたものではなく、「カリキュラムの開発、具体的な教材の準備と評価、学習上に現れる様々な問題を診断、及びテスト」に効果的に適用できるものとして意図されたものである。

現在では、対照分析仮説を強い型と弱い型に分けて考えるのが普通である。

強い型では、該当する二つの言語の対照分析によって外国語の習得上の誤用が全て予測できるとする。

これに対し、弱い型は誤用の予測力ではなく、単なる確認力を認めるのに留まる。つまり対照分析は実際に観察された誤用のうちのどれが干渉によるものかを追認するのに役立つとするものである。

この区別は、対照分析仮説が様々な観点から批判を受けたことを反映して行われたものである。70年代の初期までに行われた批判を経験的批判、理論的批判、実践的批判の三つの観点にまとめることができる。

まず経験的な観点からは、強い対照分析仮説の予測力に疑

間が出される。このことは、干渉によらない誤用が存在することと、当然予測される誤用が実際には生じないことで指摘される。

前者の事例として、例えば、goedが挙げることができる。これは学習者の母語の違いとは無関係に生じるタイプの誤用であり、対照分析仮説では説明できない。この種の誤用は、英語を母語として習得する子供においても確認されるものであり、英語の文法体系の中で行われる過般化に原因を返すべきである。

後者の例としては、フランス語を母語とする英語学習者において、母語の接語代名詞を含んだJe t'aimeに相当するI love youという誤用が観察されないことを挙げることができる。この現象は対照分析では説明できないもので、恐らく言語の有標性の原理で説明すべきものであろう。

理論的批判は、対照分析仮説の理論的支柱に対する批判である。

まず第一に、この仮説が拠っている行動主義的な言語習得観に対する批判を挙げなければならない。言語習得を言語的習慣の形成出ると捉え、刺激に対する反応や強化の概念でその過程を説明しようとする立場は、Chomskyによって厳しく批判された。したがって、対照分析仮説はその最も基本的な理論的前提を失うことになった。

次に、この仮説では、違いの程度が学習上の困難さの程度に反映され、困難な点が誤用を生むと考えられているが、このような単純な関連付けに対して批判がなされる。つまり、「違い

は言語的な概念であるのに対し、困難さは心理的な念であり」、両者を同一的に関係付けるのは誤っている。しばしば指摘されるように、外国語の習得で最も難しいのは、二つの言語が大幅に異なっている点ではなく、むしろ似通っていて微妙に異なっている点にあることが多い。また難しいからそれだけ誤用が生じやすいとするのも、単純すぎる考え方である。

第三に、対照分析が言語の極めて表面的なレベルでしか行われていないことに対する批判がある。つまり、表面的なレベルは内的経過の結果として現れるものであるが、対照分析仮説はこの過程的な面を考慮に入れず、表面的な結果の面だけ言語の習得を説明しようとするものであり、この点において欠陥を持っている。

実践的な観点からの批判は、対照分析がどの程度まで言語教師の実践に役立つかという点においてなされる。つまり、「対照分析によってなされた多くの予測は表面的なものでしかなく、誤用がどこで生じやすいかということについて標準的な教師が実践的な経験として持っていることを単に確認する程度にとどまることが判明した」のである。

1.2.3 誤用分析

対照分析仮説がこのように批判される中で、60年代の終わりに、それに代わる新しい考えが生まれた。これは誤用分析と呼ばれる。この変遷の根底には、誤用に対する見方の根本的な変化がある。すでに見たように、従来は誤用を人間的な弱点の誤れであったり、母語からの干渉の結果であると見な